HCニューズレター

No.21

Human Care News Letter

2020年8月 日本ヒューマン・ケア心理学会

学会新体制の発足

第八期会長挨拶

日本赤十字看護大学　遠藤 公久



日本ヒューマン・ケア心理学会
第八期会長 遠藤公久先生

いま全世界は、およそ百年前のスペイン風邪以来の大規模なパンデミックを経験しています。新型コロナウィルス感染症(COVID-19)により、多くの大切な生命が奪われてしまいました(今もいます)。本学会の会員には看護師の方も多く、医療の最前線で献身的に従事されている皆様には心から感謝を申し上げます。

我が国では感染拡大の第一波がようやく収束しつつあるなか、本学会では第八期の新体制が発足されました。理事会、総会、そして学術集会が順延されるなど、先行き不透明な船出となりましたが、新型コロナウィルス感染に対応した新しい学会運営を模索しつつ、将来をしっかり見据えて参りたいと思いますので、どうぞご協力よろしくお願い申し上げます。

さて、ここでは第七期の三年間における編集、学術、研修、広報の各委員会の活動のご報告をさせていただき、第八期の課題について皆様と共有したく存じます。

1. 学会誌：編集委員会(安保委員長)の皆さま、そして査読にご協力いただきました先生方のおかげで、論文審査の迅速化が進み、掲載もスピードアップされています。今後は、さらなる投稿数の増加への呼びかけ、査読者候補者のデータの充実、掲載論文の会員外への公開、最新論文閲覧のパスワード管理、掲載決定論文の(冊子体発効前の)早期公開などが課題として挙げられます。

2. 学術活動：学術委員会(清水委員長)の皆さま、そして山梨大学(中込大会委員長)、京都橘大学(菅大会委員長)、桜美林大学(長田大会委員長)そして関係者皆様のおかげで、第十九～二十一回学術集会を無事開催することができました。また、学術委員会企画ラウンドテーブルの開催、若手研究者を奨励する目的の「研究助成」制度の企画運営など勢力的に活動いただきました。今後もご意見や新企画等ございましたら、新委員長(中込理事)までお寄せください。

3. 研修：研修会は年一回学術集会時に開催されております。研修委員会(木村委員長)の皆さま、そして大会主催者側の皆さまが協力して、会員にとって有意義な研修を企画・実行してくださいました(「動機づけ面接法」「児童虐待」の対応に役立つ解決志向・入門編」「解決志向のディスカッション手法を学ぶ」)。今後は、参加者による研修会の評価の実施、研修参加者の増加に向けた広報戦略、また研修の年度内の複数開催などが課題として挙げられます。

4. 広報・ホームページの充実のため、広報委員会(羽鳥委員長)の皆さまにより、更新のスピードアップに向けた試みを進められてまいりました。第八期では、広報活動をさらに活発に行うこと、そして新規会員獲得に向けた新たな広報戦略が必要であると考えらます。また、毎年一回のニューズレターも発刊していただいております。会員の皆さまにおかれましては、ニューズレターの執筆等に是非ともご協力をお願いいたします。

以上、たくさんの方たちのご支援(ケア)をいただきながら、会員の方たちにとって意味ある魅力的な学会づくりを目指しております。そのために、是非とも皆様から忌憚のないご意見を頂戴できれば幸甚です。そして、第八期においても、他の学会にないケアにおける心理学の叡智を、各方面の実践に活かされるように提言していきたいと存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

日本ヒューマン・ケア心理学会 第八期理事一覧

顧問　小玉 正博　埼玉学園大学

会長　遠藤 公久　日本赤十字看護大学

副会長　安保 英勇　東北大学
石川 智　杏林大学
石村 郁夫　東京成徳大学
今井田 貴裕　甲南大学
梅村 美代志　聖徳大学
大場 良子　埼玉県立大学
長田 久雄　桜美林大学
片山 富美代　桐蔭横浜大学
北田 雅　京都大学
木村 登紀子　いちかわ野の花心理臨床研究所
小泉 隆平　近畿大学
小正 浩徳　龍谷大学
佐居 由美　聖路加国際大学
清水 裕子　香川大学
羽鳥 健司　埼玉学園大学
中込 さと子　信州大学
西嶋 雅樹　島根大学
山内 朋子　日本赤十字看護大学
山崎 登志子　広島国際大学

監事　島井 哲志　関西福祉科学大学
監事　中村 恵子　東北福祉大学

五十音順

痛みとヒューマン・ケア

日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会 第二十一回大会を終えて

桜美林大学教授　長田　久雄

二〇一九年六月十五日と十六日に桜美林大学四谷キャンパスで開催されました日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第二十一回大会を担当させて頂きました。私は、本学会には、設立、そして第一回大会から関わらせて頂いて参りましたので、二十年以上経過して、このような機会を与えて頂いたことに感謝申し上げます。大会参加者が五十七人、懇親会参加者が二十八人と、例年に比べて参加者数が少なかったことは残念でございました。事前の広報不足等を反省しておりますが、下記の通り内容的には充実した大会であったと、ご参加くださった先生方、準備の労をお取り頂いた皆様に心より感謝申し上げます。

ヒューマン・ケアの領域は多岐に亘り、対象も多様です。そのような中で、今回の大会では、「痛みとヒューマン・ケア」をメインテーマにさせて頂きました。慢性疼痛に苦しむ方は多いと思われますが、痛みのケアは、医学だけでなく、看護学や心理学が貢献する余地が、まだまだ多く残されている分野ではないでしょうか。私は現在、順天堂大学ペインクリニック講座に関わらせて頂いておりますが、そこでのカンファレンスなどでも、集学的アプローチが実践されております。そのようなことから、今回は大会企画シンポジウムのテーマを「痛みに対するヒューマン・ケア・アプローチ」とさせて頂き、カンファレンスでご一緒している井関雅子先生、村上安壽子先生、杉山尚子先生、土居真太郎先生に、話題提供と指定討論をお願い致しました。

学会本部のご尽力により、今回の大会では、初日に当たる六月十五日には、研修会と学術委員会企画のラウンドテーブルを開催して頂きました。研修会は立正大学心理学部特任教授、鹿嶋真弓先生に「解決志向のディスカッション手法を学ぶ」というテーマでお願い致しました。鹿嶋先生は、NHK「プロフェッショナル　仕事の流儀」で学級集団づくりや学級経営に関する内容でご紹介されましたが、問題解決に向けたディスカッション手法のコツを知り、現場で実践するためのスキルを身につけるために、大変有意義な研修をしてくださいました。学術委員会企画ラウンドテーブルでは、清水裕子先生、小玉正博先生、中込さと子先生、遠藤公久先生のご企画で、ヒューマン・ケアと結びつきの強いスピリチュアルケアに関して取り上げて頂くことができました。

二日目の六月十六日には、特別話題提供として、Turkey 共和国のナズィリでの実践を通した、高齢期における精神面での問題・原因と対策を、アクデニズ大学のイスマイル・トゥファン先生と村上育子先生にお話し頂きました。一般演題としては、六演題の口頭発表、十三演題のポスター発表、一件の自主企画シンポジウムをして頂きましたが、ご協力くださった先生方に御礼申し上げます。優秀口頭発表賞として宇野あかり先生と今井田貴裕先生、優秀ポスター発表賞として阪無勇士先生が選出されましたが、お祝い申し上げます。

次回の二十二回大会は、山崎登志子大会長の下、広島国際大学での開催が予定されております。多くの皆様にご参加頂き、活発な大会になることを祈念しております。



大会委員長　長田久雄先生

大会企画シンポジウム
「痛みに対するヒューマン・ケア・アプローチ」

二〇一九年六月十六日　東京千駄ヶ谷の桜美林大学四谷キャンパスで日本ヒューマン・ケア心理学会　第二十一回大会が開催されました。大会企画シンポジウム「痛みに対するヒューマン・ケア・アプローチ」では疼痛治療に対する心理的アプローチを紹介していただきました。

始めに順天堂大学医学部附属順天堂医院麻酔科ペインクリニック講座の井関雅子教授より「慢性疼痛を適切に評価し、最良の治療に結びつけるために」と題して基礎的な痛みの定義・分類・発生機序についてご講演いただきました。侵害受容性疼痛や神経障害性疼痛など痛みに種類があることや「痛み」には多種多様な痛みの表現方法があること、その評価の仕方も一つでは無いということを学びました。「痛み」が感覚と同時に情動でもあるということに驚きを覚えた方も多かったのではないでしょうか。他人の痛みを理解することの難しさに思いを馳せた方もいらっしゃったかもしれません。

次に順天堂大学医学部附属順天堂医院麻酔科ペインクリニック臨床心理士の村上安壽子先生に「慢性疼痛疾患における臨床心理士の重要な役割～身体疾患への今後の応用可能性～」と題して、慢性痛の心理社会的な側面について具体的な症例を挙げながら解説をしていただきました。臨床経過が長くなるにつれて「痛み」の感覚面よりも心理社会面の影響が強くなること、患者とのやり取りで医療者が消耗しやすいこと、医療者と患者の信頼関係を構築することが困難な状態でスタートを切ることが一般的な心理臨床のケー

スと異なると紹介されていました。また、心理面のみに注視するのではなく身体疾患のスクリーニングも併せて行うケースが多いということも印象的でした。

最後に星槎大学大学院教育学研究科の杉山尚子先生に「痛みに対する心理学的アプローチ～行動分析学から慢性疼痛を考える～」と題して、行動分析学を用いた痛みへのアプローチをご紹介いただきました。「痛み」を「痛み行動」としてとらえることで客観的に評価できる対象とみなすことは、これまでの「痛み」の概念に大きなブレイクスルーを与えました。「痛み」が行動によって制御されるという考え方は理学療法による疼痛治療とも非常に親和性が高く、臨床の現場で特に取り入れていきたい概念だと思います。講演では実際に行動を変容させて痛みを治療していく過程をご紹介いただき、痛み治療に対する心理学の大きな可能性を示していただきました。

（松弘会三愛病院ペインクリニック科医師　土居真太郎）



シンポジウムでの土居先生

自主企画シンポジウム

「健康生成論再考その1 ―若手研究者の一陽来復―」

二〇一九年六月十六日に桜美林大学四谷キャンパスにて、自主企画シンポジウム「健康生成論再考その1―若手研究者の一陽来復―」が開催されました。この度のシンポジウムでは、健康生成論の中核をなすストレス対処・健康持続能力概念である首尾一貫感覚（Sense of Coherence, 以下 SOC）の研究に取り組んでおられる三名の先生方より、これまでの研究結果や研究の展望についてお話を伺いました。

アントノフスキー博士（1987）によって提案されたSOCは、これまでの医学モデルに依拠した疾病生成論に対して、「健康はどのように回復し維持・増進されるのか」という新たな発想から生まれた理論であることから、私自身も医療職の立場として興味深く聞かせていただきました。

雲財先生による「SOCの三要素を弁別する試みと限界」や、磯和先生による「他概念との関係から見るSOC尺度の限界点」についての話題提供では、SOCの構成要素である把握可能感、処理可能感、有意味感に対して、独自性とバランスに注目した検討が必要であること、SOCを測定する既存尺度の限界を課題に挙げ、今後の展望として理論的実証的に再考する必要性があることが強調されました。

今井田先生による「心理臨床に役立つ汎抵抗資源を探求して」のなかでは、汎抵抗資源（GRRs）とSOCを媒介変数としたストレス反応の緩和モデルの実証的研究などが紹介され、対象が抱えるストレスの度合いによって、モデルの適合度に影響があることが示されておりました。この実証研究における健康生成モデルでは、一般大学生は適合度が悪く、その一方で、高負荷のストレッサーに対する対処を要する看護師は、ストレッサー下でもモデルの適合度がよいという結果が、SOCの特性を示しており、面白いと感じました。

SOC概念の端緒は、過酷な環境下で生還した人々に共通した要素として生み出された概念であるため、強いストレッサーを多く受けている対象者への研究は意味深いと感じています。今回のシンポジウムを通じて、ヒューマン・ケアにおけるSOC研究について考える機会となり、今後さらなる健康生成論研究の発展に期待したいと思います。

（埼玉県立大学　大場良子）

特別話題提供

「高齢者における精神面での問題・原因と対策 ―トルコ・ナズィリでの実践から―」

トルコ共和国のアクデニズ大学保健学部ジェロントロジー（老年学）学科教授のイスマイル・トウファン教授と、同時通訳に同大学講師の村上育子先生をお招きし、長田久雄大会長のファシリテーションでトルコの高齢者問題についてお話しいただきました。

トルコは、韓国に続き高齢化の加速率が高い国ですが、最大の問題はそれに対する社会政策を伴っていないことです。二〇一八年の総人口は八千二百万人で、六十五歳以上人口はそのうち八・八パーセントです。その現状は、平均年齢七十八才、人口の半分が三十二歳以下で出生率二・〇七%、最多の世帯構成員は四名（二十三・五%）とほぼ日本の一九七〇年代の水準に匹敵しており、高齢者ケアは大半が家族に依存しています。しかし、都市部ほど核家族化と少子化が進み、平均寿命が急速に延びているため、トウファン教授は社会資源の整備を訴え、政府に介護保険の導入を提言しました。

さて、ナズィリは高齢化の進む小さな町です。トウファン教授は、そこでの実態調査から、人の高齢期を決定するのは、個人と環境との関係であることを実感し、家族に依存しない高齢者のサポートシステムの開発に着手されました。高齢期の孤独・ひきこもりは、認知症や身体機能低下など二次的問題に直結するので、元気老人が集い活動するアクティブ・エイジングセンターが設立されました。また、トウファン教授の高齢者大学は、希望者でいつも盛況です。これらのモデル事業を発展させ、予防もケアも包含するサービスシステムの実現意義について、トウファン教授の熱弁が振るわれました。

（東北福祉大学　中村恵子）

研修会

「解決志向のディスカッション手法を学ぶ」

立正大学　鹿嶋　真弓

二〇一九年六月十五日に研修会が行われました。今回は立正大学の鹿嶋真弓先生をお招きし、「解決志向のディスカッション手法に学ぶ」というテーマでお話いただきました。当日は対人援助職として従事されている方から多くの参加がありました。

はじめに、学校現場で行われる一般的なケース会議と今回のテーマであるブリーフミーティングの違いについてご紹介いただきました。ブリーフミーティングとは、学校内の先生の知恵が結集されてより良く問題解決がはかれる会議のことで、時間的負担の軽減や会議におけるゴールの明確化など、非常に効率的かつシステマティックであるとのお話がありました。例えばケース会議で事例の報告をすると通常なら長時間を要しますが、ブリーフミーティングでは五分間です。これは「困っていること」にのみ焦点化して報告することで大幅な時間短縮が可能になるとのことでした。ケース会議では、生育歴や環境要因についても重点的に検討する場合が多いのですが、ブリーフミーティングはそういった複雑に絡み合うものを追求し過ぎないか、あるいは取り扱わないことから、非常にスマートな印象を受けました。ブリーフミーティングには、短時間で効率的にケース会議を進める工夫が凝縮されていることを先生のご説明で理解することができました。

続いて、鹿嶋先生がカタリスト（＝進行役）として務められ、参加者から出された事例を基に三十分ブリーフミーティングのデモンストレーションが行われました。デモンストレーションでは適応指導教室に通室する生徒の事例が取り扱われ、実際に事例提供者には報告を五分以内で行ってもらいました。五分間の報告である以上、詳細な生育歴などは省略されますが、困っていることのみ報告することにより、現時点で解決すべきことが明確化されていました。事例報告の次はリソース探しの時間が十分間設定されました。リソース探しでは、多様な観点からの情報収集が行われます。この時間で事例報告の際に不足していた情報が補填されました。次にリソース探しの時間で集まった情報からゴール設定を行いました。ゴール設定では、具体的で現実的な目標であることが条件であり、「～しない」といった否定的なものや、抽象的なゴール設定となった場合はゴールメンテナンスを行い、内容を肯定的なものへ修正することが重要であるとのことでした。ゴール設定ができたら解決のための対応策を考えました。何をどうすれば良いか明確な策が出た場合は、そのままゴールとなりますが、対応策が見つからない場合はゴール設定の見直しや、カタリストが発想の転換を促す形で介入する場合もありえると鹿嶋先生はお話されていました。


研修会での鹿嶋先生

デモンストレーション後は各テーブルでそれぞれ事例提供者とカタリストを決め、三十分ブリーフミーティングを行いました。すべてのテーブルがゴールに到達したところで、テーブルごとにまとまった内容と、実際にブリーフミーティングを行ってみて難しかった点などの発表がありました。各テーブルの発表からは、「解決策は出るものの、ゴール設定で絞り切れない」という感想が多く出ていました。

実際に三十分ブリーフミーティングを経験してみて、私個人が実感したことは、キャリアや専門性の垣根を越えて、参加者全員が発言しやすい環境になっていることでした。ブリーフミーティングは時間的負担の軽減や会議進行の効率化だけでなく、参加者自身もクリアな気持ちで臨める、会議の新しいカタチであると思いました。

（狛江市教育研究所　宮戸悠貴）

学術委員会企画ラウンドテーブル

「ヒューマン・ケアとスピリチュアルケア」

二〇一九年六月十五日、桜美林大学四谷キャンパスにて、学術委員会企画ラウンドテーブルスピリチュアルケアが開催されました。ラウンドテーブル「ヒューマン・ケアとスピリチュアルケア」では、スピリチュアルケアに携わる心理学／看護学の研究者や専門家の四名の先生方から講演を伺い、研修参加者との意見交換を行いました。

遠藤公久先生（日本赤十字看護大学看護学部／教授）からは、ヒューマン・ケアとスピリチュアルケアについてご紹介いただきました。スピリチュアルケアの導入として、スピリチュアリティの考え方、ヒューマン・ケアとスピリチュアルケアの関係性についてご教示いただきました。

木村登紀子先生（いちかわ野の花心理臨床研究所）からは、臨床実践の場におけるスピリチュアルケアの実際についてご紹介いただきました。医療・福祉・教育・産業・司法などさまざまな臨床実践の場においてスピリチュアルケアが必要とされていること、そしてスピリチュアルケアにおける「呼応」としてケアされることによってケアをする、ケアをすることによってケアをされるというケアの相互性についてご教示いただきました。

中込さと子先生（信州大学医学部／教授）からは、遺伝性疾患とスピリチュアルケアについてご紹介いただきました。遺伝性疾患や人工妊娠中絶など人間の生に関することからスピリチュアリティやスピリチュアルケアについてご教示いただきました。

清水先生（香川大学医学部／教授）からは、看護教育としてのスピリチュアルケアについてご紹介いただきました。看護学生へのスピリチュアルケア教育の実際やドイツのホスピスで行われているスピリチュアルケアの実際についてご教示いただきました。

四名の専門家の講演後、参加者との意見交換を行いました。講演前多くの参加者がスピリチュアリティを不明瞭に捉えていましたが、講演後には自身の経験からスピリチュアリティを説明し、スピリチュアルケアは何かをするという「to do」よりも共にいるという「to be」であることの重要性について意見を述べられました。

本ラウンドテーブルに参加して、ヒューマン・ケアとはスピリチュアルケアそのものであるということを再考することができ、学び多い時間となりました。企画・運営に当たられた先生方に、この場をお借りして感謝申し上げます。

（香川大学　上原星奈）



ラウンドテーブルで話題提供する遠藤先生

第二十一回大会優秀発表賞　口頭発表部門

「優秀発表賞を受賞して」

東北大学教育学研究科総合教育科学専攻　宇野あかり

この度は優秀口頭発表賞を授与して頂き、大変光栄に思います。調査に協力して下さった皆様、お世話になっている大学院の皆、日頃から親身にご指導して下さる安保英勇先生はじめコースの先生方に深くお礼申し上げます。大会期間中には、多くの先生方から貴重なご意見ご感想を頂きましたことも、併せて感謝申し上げます。

現在は緩和ケア領域を対象に、スタッフの心理的適応のプロセスを、特に「死のとらえ方」と「時間的展望（個人の心理的な時間のとらえ方）」という二つの観点から検討しております。緩和ケアでは患者の死が常に身近にあることで、スタッフの心理的負担が大きいことが指摘されています。一方で、そのような環境にいるからこそ、スタッフは自らの人生を眺め渡し、過去・現在・未来を日常的に深く考え、時間的展望を発達させている機会を得ていることに注目しました。このように、「死」が日常的な環境に身をおくことが、自身の人間的成長に繋がるという気づきを得ることで、スタッフの精神的健康の増進に寄与できればと考えております。本研究はその第一歩であり、今後も研究を積み重ねることで、微力ながらこの分野の発展に役に立てれば幸いです。

また、今回の学術委員会企画ラウンドテーブルでは、研究テーマとも近い「スピリチュアルケア」がテーマとされており、当日の先生方の話題提供や参加者の皆様のご意見は、大変勉強になる有意義なものでした。研究を進める上で参考にさせて頂きます。

幸運なことに現在は、緩和ケア病棟で患者さんへの傾聴ボランティアや家族教室のアシスタントとして活動しており、現場の様子を直に目にする機会を持つことができています。このような貴重な経験で得たことを、研究という形で多くの方に還元し、恩返ししていければと思います。研究者としても心理士としても、漸くスタートラインに立つか立たないかという次元で彷徨っている身分ですが、今回の受賞を励みにひたむきに精進し、社会に役に立つ人材になれるよう努めて参りたいと思います。

第二十一回大会優秀発表賞　口頭発表部門

「優秀発表賞を受賞して」

甲南大学文学部・国際心理支援協会　今井田 貴裕

日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第二十一回大会において『首尾一貫感覚の構成要素に着目した健康生成モデルの検討ー有意味感がストレッサーの評価を規定する?ー』と題した口頭発表に対して優秀発表賞を賜りました。研究へのご示唆や審査をして頂いた先生方と丁寧なご指導をして下さった指導教授の甲南大学の福井義一先生に、改めて深く感謝と御礼を申し上げます。

本研究では、資源を動員してストレッサーに対処する能力である首尾一貫感覚の三つの下位要素（把握可能感・処理可能感・有意味感）に注目しました。把握可能感はストレッサーに対して構造的に知覚できる感覚、処理可能感は内外の多様な資源を動員してストレッサーを対処することが可能であるという感覚、有意味感はストレッサーの対処に意味を見出せる感覚と定義されています。これらは、ストレッサーへの対処を通じて発達していきますが、把握・処理可能感と有意味感は異なる性質を持つ可能性が先行研究で示唆されています。有意味感が強い人々は、ストレッサーに対して能動的に対処しようとするため、必要な資源を積極的に探求して動員しようとすることが指摘されています。そのため、有意味感がストレッサーの評価と関係していると予測しました。クラスタ分析の結果、全ての群で有意味感が強くなると、ストレッサーの評価は低くなっていることが明らかになりました。以上から、有意味感こそがストレッサーの評価を規定する決定的な要因である可能性が示されました。

私の心理臨床実践においても、トラウマティックなストレス経験による後遺症から回復する過程で、生きる意味を見出していくクライエントに出会うことが多々あります。今回の受賞を機に、今後はクライエントの首尾一貫感覚の回復に寄与する研究を行うことで、心理臨床家を中心とした実践家にとっても有用な報告をしていきたいと思っております。この度は、誠にありがとうございました。

第二十一回大会優秀発表賞　ポスター発表部門

「優秀発表賞を受賞して」

昭和学院短期大学　阪無 勇士

この度は優秀発表賞を授与して頂き、大変光栄に感じております。審査をはじめとして大会運営関係者の皆様、ならびに連名発表者である東京成徳大学石村郁夫先生には心より感謝申し上げます。

私はこれまで児童相談所一時保護所（以下、保護所）に勤めながら、虐待を受けた児童支援を検討して参りました。保護所の実態は地域格差がありますが、虐待を受けた児童の集団生活の場であり、児童は自然と問題行動を示します。そして、支援と業務に追われる職員は、対応力を高める教育的なサポートを受ける機会が極めて少なく、自身の疲弊感を十分に癒すことのできないまま保護所の運営に携わります。特に、児童へと管理的に関わることが許容される職員チームに所属する者ほどバーンアウトの傾向にあり、管理的な関わりを優先させます。さらに、管理的な関わりを受けた児童ほど、怒りや不安を問題行動として示す状況にありました。

このように、保護所における支援の悪循環を整理したとき、必要なことは批判ではなく、児童支援、児童を支える職員支援、そして、職員を支える組織の仕組みであることが自然と明らかとなりました。我が国ではこうした状況の対策の一つとして受容的な関わりの重要性が二〇一八年の一時保護ガイドラインに示されましたが、児童相談所運営指針が一九九〇年に提示されてから約三十年もの間、児童支援に有効な職員の関わり方が問われる状況にあったといえます。

そこで本大会では、かねてより行ってきた受容的な関わりに関する研究成果を踏まえ、職員の受容的な関わりを高める研修を構想し、その研修効果の発表をさせて頂きました。研修前後で職員の受容的な関わりが高まるのみならず、児童の問題に気づき、受容的に関わりやすい組織を築こうとする意識・態度の高まることが明らかとなりました。職員への心理・教育的なサポートの重要性を改めて確認することができました。

今後もなお、実践と研究を繋ぐ役目を担って参ります。今後ともご高配を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会
第22回大会のお知らせ
〈ヒューマン・ケアから考えるしあわせ〉

２０２０年度大会が延期となり、左記に変更になりました。詳細は後日お知らせいたします。

開催日程：２０２１年７月３日(土)～４日(日)
開催会場：広島国際大学呉キャンパス(予定)

大会テーマ：「ヒューマン・ケアから考えるしあわせ」

・基調講演　「しあわせのメカニズム」
　講　師：前野隆司先生
　(慶応義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科・教授)
・シンポジウム「しあわせを生み出す力」
・研修会テーマ「対話の力：生きること、死ぬことをめぐるヒューマン・ケア」

大会事務局：〒737-0112　広島県呉市広古新開5-1-1
広島国際大学看護学部
日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第二十二回大会事務局
TEL/FAX　0823-73-8388
E-mail：t-yamaza@hirokoku-u.ac.jp
第二十二回　大会準備委員会委員長
山崎登志子(広島国際大学看護学部学部長・教授)

二〇二〇年度　日本ヒューマン・ケア心理学会研究助成のご案内

日本ヒューマン・ケア心理学会では二〇一八年から学会員の研究活動を奨励し、支援するための助成金を支給しています。二〇一九年度は、関谷大輝氏の「演じるスキルの向上を通じてケア従事者の支援スキルと職業的魅力を高める試み―〝ポジティブな演技〟の実現に寄与する演じ方教育プログラムの作成を目指して―」に助成いたしました。

さて、二〇二〇年度は、新型コロナウイルス感染拡大という大事件から始まり、ケア、教育、研究を始め、ご自身の生活におきましても変化を余儀なくされたことでしょう。そのため、申請時期を八月末日に遅らせました。現在進行中の研究活動の助けになれば幸いです。なお、申請に必要な応募文書等はホームページに掲載しております。応募要項をよく読み、必要書類を学会事務局にご送付ください。皆様の応募をお待ちしております。

二〇二〇年六月二十七日　学術委員会一同

編集委員会より

機関誌「ヒューマン・ケア研究」は年二回発行しております。論文の投稿は随時受け付けておりますので、積極的な投稿を期待しています。執筆要項・編集規程は学会のホームページに掲載しておりますので、ご参照ください。ご不明な点などは左記機関誌編集事務局までお願いいたします。

Web担当からのお知らせ

学会のWebサイトは、下記の通りです。
http://www.j-hc.jp
なお、現在会員向けに限定したサービスとして「ヒューマン・ケア研究」に掲載されている原著論文(2000-2019No.1)のPDFが学会Webサイトからダウンロードできるようになっております。ご利用の際には以下のIDとパスワードを入力する必要があります。また、このパスワードは会員以外にはお知らせにならないようお願いします。

ID：HC2020　　パスワード：F3m9t

(Web担当　羽鳥健司)

編集後記

平素より会員の皆様方には多大なるご助力を頂いており、大変感謝しております。ニューズレターの発行が遅れましたことをお詫び申し上げます。本学会は発足以来二十一年が経ち、徐々に伝統が出来上がり、世代交代が進み始めています。偉大な先輩方の熱い想いを基盤にしながら、新しいことにも挑戦していきたいです。益々発展させていきたいと思いますので、皆様の変わらぬご指導とご支援をお願い致します。

新型コロナウィルスにより、皆様におかれましても大変なご苦労をされていると思います。本学会でも今年度の学術集会は延期となりました。来年は、広島国際大学の山崎登志子先生のもとで学術集会第二十二回大会が開催されます。どうかご自愛いただき、次回大会では会員同士で再会を喜び合えるようにできればと祈念しております。

(広報担当　羽鳥健司)

学会事務局および機関誌編集事務局の連絡先は次のとおりです。

●学会事務局
〒114-0033　東京都北区十条台1-7-13
東京成徳大学　石村郁夫研究室気付　日本ヒューマン・ケア心理学会事務局
Tel & Fax: 03-5948-4478
E-mail: office.humancare@gmail.com

●機関誌編集事務局
〒980-8576　宮城県仙台市青葉区川内27-1
東北大学大学院教育学研究科　安保研究室気付
「ヒューマン・ケア研究」編集委員会
Tel & Fax:　022-795-6149
E-mail:　amb@sed.tohoku.ac.jp